
1820年代の出島における音楽状況

オペレッタ上演とシーボルトのピアノを中心に

課題番号 17520442

平成17年度～平成18年度科学研究費補助金

(基盤研究(C)) 研究成果報告書

平成19年5月

研究代表者 竹井 成美

宮崎大学 教育文化学部 教授

はしがき

本研究は、平成 17 年度～平成 18 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) に採択され、2 年間で総額 700 千円の研究である。

1614 年のキリスト教禁止令、1639 の鎖国令に続く 1641 年には、オランダ人は出島に移され、1868 年の明治政府誕生までの 200 余年間をそこで過ごす。その間、1549 年のキリスト教伝来以来、西洋の音楽は、日本にある程度根付き花開くまでになっていたが、一連の禁止令などによって表舞台から姿を消すことになる。しかし、『オランダ商館日記』などによると、1820 年に長崎奉行の交代式でオペレッタが上演されたという記述があったり、出島の医官シーボルトが在日中にピアノ作品を書いたり、そのピアノ自体を山口・萩の豪商熊谷五右衛門義比に贈って帰国したという資料も散見する。本研究では、主として平成 17 年度には、①出島で行われたオペレッタの内容について、平成 18 年度には、②いわゆるシーボルトのピアノの実態調査とその作品について、研究した。

その結果、オペレッタについては、「短気な男」と「二人の漁師とミルク売り娘」が上演されたこと、その上演については、シーボルトのお抱え絵師の川原慶賀が七枚の絵に表して残しており、当時の様子を物語る貴重な資料となっていることなどが判明した。一方、シーボルトのピアノは、1955 年に郷土史家の田中助一によって発見され、その後広島楽器店で修理されたが、2000 年の「日蘭交流 400 周年」を記念したコンサートで再度音がよみがえるものの、全面的な修復までには至らなかった。しかし、1965 年に財団法人熊谷美術館が発足し「シーボルトのピアノ」として展示されてから今日まで、同館の貴重な一品として所蔵されている。

このように、約 230 年にわたって閉鎖的な小さな出島の中で、表舞台から姿を消していた西洋音楽が、どのように鳴り響き、今日に受け継がれてきたかを検証することができた。

研究組織

研究者： 竹井 成美 （宮崎大学 教育文化学部 教授）

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成17年度	300	0	300
平成18年度	400	0	400
総計	700	0	700

研究発表

（1）学会誌等

- ① 竹井成美 「ゆふいん西洋音楽探訪」
由布院空想の森アルテジオ 2005年7月29日
- ② 竹井成美 「ゆふいん西洋音楽探訪」
由布院空想の森アルテジオ 2006年7月28日
- ③ 竹井成美 「1820年代の出島における音楽状況」
宮崎大学教育文化学部研究紀要に平成19年度中に発表予定

1820年代における出島の音楽状況
オペレッタ上演とシーボルトのピアノを中心として

宮崎大学教育文化学部 竹井成美

- 1 西洋音楽伝来と出島の存在
- 2 シーボルトとお抱え絵師・川原慶賀
- 3 オペレッタ上演
- 4 シーボルトのピアノ

1 西洋音楽伝来と出島の存在

(1) 西洋音楽伝来

1543年のポルトガル人の種子島漂流に始まる日本とヨーロッパの交流は1549年のフランシスコ・ザビエルの来日をお膳立てし、それらをきっかけに、その後の、約160年間にわたる豊かな東西交流の歴史が始まる。

とくに、キリスト教伝来は、西洋音楽の種を日本に蒔き、山口、大分、長崎の地で、一部の人々の間ではあるが、日本人によるグレゴリオ聖歌の歌唱や鍵盤楽器、弦楽器などによる西洋音楽の演奏を将来することになる。

1552年のナタラ、つまりクリスマスに、山口では「私たちは歌ミサを捧げた」という、ポルトガル宣教師・アルカソヴァの書簡が残されている。つまり、ポルトガル宣教師たちがグレゴリオ聖歌を歌いながらミサを挙行了たことを伝えている。山口は、ザビエルが大内義隆を訪問し、鍵盤楽器を贈ったりした記録も残り、ザビエルが去った後、トルレス神父のもとで、山口は、しばらくキリスト教布教の中心地であった。

また、その後、そのトルレス神父が移り住んだ豊後府内（現大分市）では、1557年のポルトガル宣教師・ヴィレラの書簡に、「聖歌隊が2つあり、聖週間に私たちも手伝って歌を歌った」といった内容が記されている（この史料を基に、大分は『西洋音楽発祥の地』を名乗っている）。つまり、大友宗麟のお膝元の豊後府内では、すでに1555年あたりから、教理学校で子どもたちにグレゴリオ聖歌などが教えられ、子どもたちは帰る道々“ミゼレレ”というグレゴリオ聖歌を口ずさみ、大人たちも聞き覚えて歌えるようになった、と伝えている。このほか、簡単な弦楽器（書簡などにはヴィオラ・ダルコ、つまり弓で

弾く弦楽器)も子どもたちに教えられていたらしく、トルレス神父が、長崎の横瀬浦に移るときには、豊後府内の少年たちが弦楽器を持って横瀬浦での行事に参加した旨の史料が残っている。

キリスト教布教の実質的責任者であるトルレス神父が長崎に移り住んだ後、布教の中心地は、豊後から長崎に移ることになる。それとともに、キリスト教にかかわる話題、とくに音楽演奏にかかわる話題も、長崎を中心にした書簡などに記されるようになる。こうした経緯からすると、豊後府内は、西洋音楽の種が蒔かれ、苗として成長する“苗床”のような働きをしたと言える。

その後の、西洋音楽の演奏にかかわる話題は、1579年に巡察師・ヴァリニャーノが来日し2台のオルガンをもたらした話題、さらに1580年から設置されるセミナリオでのカリキュラムには音楽が組み込まれていたこと、1582年に出発する“天正遣欧使節”がヨーロッパの地で音楽演奏を楽しんだ話題、使節が持ち帰った楽器で豊臣秀吉の前での御前演奏の話題、1605年に長崎で印刷された『サカラメンタ提要』の典礼書に含まれているグレゴリオ聖歌などである。

ヴァリニャーノがもたらした2台のオルガンは、1台は安土の織田信長のもとに、もう1台は豊後臼杵の大友宗麟のもとに届けられている。当時のオルガンは、楽器の後ろに風を送る“ふいご”を有し、誰かがそれを操作してパイプに風を送り音を出す仕組みのものであった。その後、天草志岐では、ブリキ製に代わって竹製のオルガンが日本人によって作成されたという史料もある。“天正遣欧使節”のうち、大友宗麟の名代として派遣された伊東マンショと有馬晴信の名代の千々石ミゲルが、ポルトガルのエヴォラで大オルガンを弾いて大喝采を受けたという記述もあることから、セミナリオでの日課で相当腕をあげていたものと思われる。

そのセミナリオでは、毎日午後2時から1時間、グレゴリオ聖歌の歌唱や、弦楽器、鍵盤楽器などの器楽演奏の時間が設けられていた。しばらくして出された「セミナリオ内規」には、日本人は簡単な合唱や弦楽器はへたなので、セミナリオでは教えないように、という記述も見られるが、さらに後に出された内規では、その文言は見られないことからすると、次第に腕を上げていった経緯が読み取れる。伊東マンショたちが臆せず大オルガンを弾いた史料からすると、鍵盤楽器のように、単に鍵盤を選んで音を出す楽器にはうまく対応できたことが伺い知れる。

ポルトガル、スペイン、イタリアと、ヨーロッパを1年8ヶ月歴訪する中で、少年使節は、宮廷で合奏を楽しんだり、大聖堂では音楽に彩られたミサにあずかるなど、当地の、いわゆるルネサンス音楽の響きを経験して帰ることになる。帰国の最後の寄港地であるマカオで発刊されたデ・サンデの『天正遣欧使節記』の中には、「日本のものと違って、ヨーロッパの音楽にはハーモニーがあってきれいだ」というミゲルの言葉が記されている。セミナリオで西洋音楽の手ほどきは受けてはいたといいながらも、当時の日本では、謡曲のように皆でうなるように斉唱する音楽しか聴いたことのなかったミゲルたちには、いわゆるルネサンス音楽のポリフォニー（多声）に満ちた音楽はいかばかりであったかは容易に想像できる。確かに、スペインではビクトリアが、またイタリアのローマでは、パレストリーナがポリフォニー音楽を数多く作曲し、その透明な音楽は人々を魅了していた時代に、少年使節たちは旅していた訳であり、その意味では、まさにルネサンス音楽の最後の輝きの中を旅したことになる。

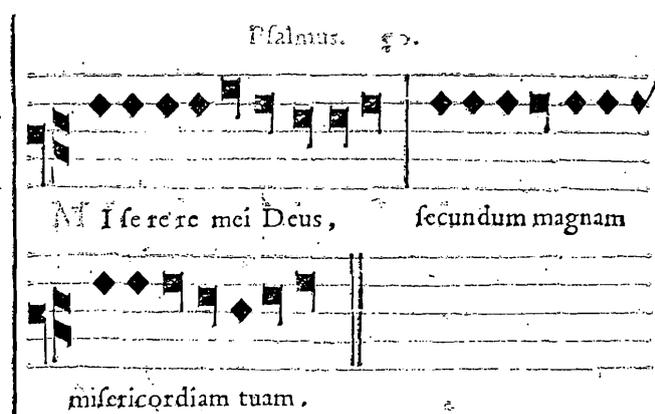
イタリアのピサでは、そんな音楽にあわせて舞踏も体験している。音楽のリズムを判別できないと当時の踊りは踊れないが、伊東マンショたちは臆せず踊れた、とサンデの『天正遣欧使節記』の中に記されていることからすると、セミナリオなどでの音楽教育の効果があったものと推測される。

1590年に帰国した少年使節たちは、土産として西洋の楽器を持ち帰っており、その楽器を携えて聚楽第を訪ね、秀吉に西洋音楽を演奏して喜ばせた、とフロイスの『日本史』に記されている。そこには「実に品よくたえなる演奏であり、秀吉は大いに喜び、3回アンコールした」とある。そのときの楽器は、レベック（3弦の弦楽器）、リュート、アルパ（いわゆるハープ）、クラヴォ（鍵盤楽器；スペインのアルカラ卿の土産）である。演奏した曲名は記されていないが、西洋音楽史家の皆川達夫氏は、当時ヨーロッパで流行していた“皇帝の歌”ではないかと推定し、現在これが定説となっている。

その後、少年使節は、河内浦（現熊本県河浦町）にあったノビシャド（修練院）に入学し、折に触れて、その楽器を携えてセミナリオの少年たちに演奏を聴かせたり教えたりしたようだ。

1605年に長崎のコレジオで印刷された400頁にも及ぶ典礼書『サカラメンタ提要』には、ゴツゴツしたネウマで記されたグレゴリオ聖歌がおさめられている。この典礼書を印刷したゲーテンベルクの印刷機は、少年使節と一緒に派遣されたドーラードという洗礼名をもつ、伊東マンショたちと同年代の少

年がヨーロッパから持ち帰ったものである。ドラードは、活版印刷術を学ぶとともに活字も持ち帰り、2色刷りの初の印刷楽譜の誕生に立ち会うことになる。朱色の五線に黒のネウマで、多重式の印刷楽譜であり、文字の印刷よりかなりの技術を要したものと思われる。この印刷楽譜の中に、豊後府内で1555年頃に歌われていたと思われるグレゴリオ聖歌“ミゼレレ”も含まれている。わずか4つの音組織からなる簡単な旋律であり、少年たちが耳から聴き覚えたそのものと推察される（楽譜は上智大学所蔵の『サカラメンタ提要』から引用）。



キリスト教関係の一部の人々に享受されたとは言え、このように、西洋音楽は、日本、とりわけ九州の地で、種が蒔かれ大きく開花した。当時さかんに描かれた南蛮屏風の中にも、アルパやビウエラ（ギターに似たもの）の図が見られる。なんらかの形で、日本人の目に触れ、折に触れて耳にもしたものと思われる。

しかし、せっかく開花した西洋音楽は、その後のキリスト教禁止令と鎖国令によって、表舞台から姿を消すことになる。西洋音楽は、キリスト教とともに日本もたらされ、発展したものであったからである。伊東マンショたちによってもたらされ、秀吉の前で演奏された楽器も、1600年頃から天草志岐で作成されていたとされる竹製のパイプオルガンも、1605年に印刷されたグレゴリオ聖歌の楽譜も、焼きはらわれたり、打ち壊されたりしてしまったのである。

長い沈黙の後、西洋音楽は出島という狭い空間で、再び脚光を浴びることになる。それは、オランダという、キリスト教とは関係がないということで、唯一日本と交渉をもっていた国との中で、再び出会うことになる。むしろ、出島という空間の中で、違った種類の音楽が、つまり祈りの音楽ではなく、世俗音

楽がずっと息をひそめていた、と言った方が良いのかも知れない。1614年のキリスト教禁止から約200年の歳月が流れていた。

(2) 出島の存在

江戸幕府は、1634年に鎖国令を出し、国を閉ざすことになるのにもない、2年の歳月をかけポルトガル人を収容する目的で長崎の出島を人工的に作ることを長崎の豪商たちに命じた。しばらくポルトガル人は出島に移り、土地使用料を長崎の豪商に払う生活が続くが、1639年、ついにポルトガル人を追放し、一時期、築造された出島は無人になった。そして1641年、平戸からオランダ東インド会社の商館を移してオランダ人を住まわせることにし、以来、1859年までの約220年間、その出島を通して、オランダ人と交渉を行うことで、出島はヨーロッパに唯一開かれた窓として、鎖国から明治期に至る近代化への重要な役割を果たすことになる。出島には、日本人は公用以外への出入りは禁止され、また、出島滞在のオランダ人は、すべてオランダ東インド会社に所属する者で、オランダ船が入港すると、日本人通司（通訳）が商館長を訪ね、積み荷の検査だけでなく、ポルトガル人などのキリスト教勢力の情報の入手にもつとめていたようだ。主な輸入品は、ベンガル産の生糸をはじめ、羅紗、ピロード、胡椒、砂糖、ガラス製品、書籍などであった。オランダ船が入港しない時期は、商館長、次席商館員をはじめとする約15人が勤務する島となった。

一方、出島には、当初からオランダ商館付きの医師が派遣されたが、そのオランダ医学の話題を聞きつけた日本人の中から医学を志す者が長崎を訪れるようになる。しかし、出島へ入ることは禁止されていたので、オランダ語通事の家で寄宿して指導を受けたり、後には、出島内の外科手術部屋で商館医の治療を見学することを許されるようになった。

そのような中に来日したシーボルトは、日本の医学教育のための学校として“鳴滝塾”を開設することになる。

また、それ以前の徳川吉宗の時代には、吉宗が実学を奨励したために、いわゆる洋書の輸入を解禁し、その結果、出島を経由してもたらされる洋書は、日本の医学や天文暦学などの研究を促進する牽引力になり、いわゆる蘭学を通じたヨーロッパの思想や思考が、日本人に大きな影響を与えていたのである。

2 シーボルトとお抱え絵師・川原慶賀

(1) シーボルトの来日

1796年に、ドイツのビュルツブルグで誕生したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、ビュルツブルグ大学で医学や博物学を学んでいる。

折しも、1814年にイギリス領からオランダに返還された東インド（旧オランダ領）の総督ファン・デア・カペレンから託されて、日本とオランダとの貿易のために、日本研究をする必要があるという使命のもと、1823年27歳になったシーボルトは出島に赴任した。時のオランダ商館長のストゥルレルは、医学だけでなく諸科学に精通し教授できる者として、長崎奉行にシーボルトを紹介することになる。シーボルトは、出島で日本人に医学を教えるかたわら、出島を離れて患者の治療にあたりたり薬草を採取することも許されていた。彼の名声は広がり、多くの日本人門下生が誕生することとなり、シーボルトの別荘である“鳴滝”に住んで教えを受けることになった。いわゆる“鳴滝塾”には日本全国から医学を志す者たちが多数集まるようになった。シーボルトによるオランダ医学は、単に書物から学ぶのではなく、いわゆる臨床に根付いたものであり、教えを受けた者の中から、オランダの書物を自ら翻訳して実力を高め、日本の医学をリードする存在となっていく。

1828年に任期を終えて帰国する矢先、シーボルトの荷物の中から、国外持ち出し禁止の品である“日本地図”が発見され（いわゆるシーボルト事件）、1829年には不名誉な国外追放になった。

その30年後の1859年に再び来日し、1861年には幕府から外交顧問の任を受け江戸に招かれるが、同年に解任され、1862年に帰国、1866年に死去した。

(2) 川原慶賀

そもそも当時の長崎には、さまざまな職種に世襲の専門職が存在した。とりわけ、海外との交流には欠かせない、中国語、オランダ語の通訳は、それぞれ「唐通事（とうつうじ）」、「阿蘭陀通事（おらんだつうじ）」と呼ばれ、代々が世襲であった。

ヨーロッパとの唯一の窓口である出島には、もう一つ、長崎奉行所の御用絵師として「唐絵目利（からえめきき）」という世襲制の職を有する、いわゆる画家も重要な役目を果たしていた。画家として活動する以外に、渡来の交易品や

幕府への献上品を写しとったり、書画や物品の鑑定も行うという役目を担っていたのである。

そんな中に、「出島出入絵師」という肩書きを得た川原慶賀がいた。幕府のために働く「唐絵目利」とは異なり、川原慶賀は、20代半ばにして、オランダ商館の求めに応じて絵を描くという職を得たのである。オランダ商館長のブロンホフや商館員のフィッセル、そして商館医であるシーボルトのためにひたすら働いた。

1826年の江戸参府に際して、ストゥルレル商館長に随行するシーボルトは、川原慶賀に同行を求めている。その書簡や著作には「画家・川原登与助～Tojosky」と記し、有能な画家として高く評価している。慶賀は、江戸参府を日本研究の集大成と位置づけていたシーボルトの目となり腕となって、学術的資料としての絵を描き続けるのである。

風物、風俗、草木、動物。日本のあらゆる文物を精緻に写し取った慶賀の絵は、そのほとんどがオランダ国立ライデン民族博物館におさめられている。

しかし、その絵は、芸術的評価より、写実的記録性としての評価が高いだけに、シーボルト研究者以外には、その名前はあまり知られていない。

その記録性としての評価の高い絵の中でも、1820年に出島で行われたオペレッタ上演を著わした7枚の絵は、得意な存在として、日本とオランダにそれぞれ残されていることが判明している。

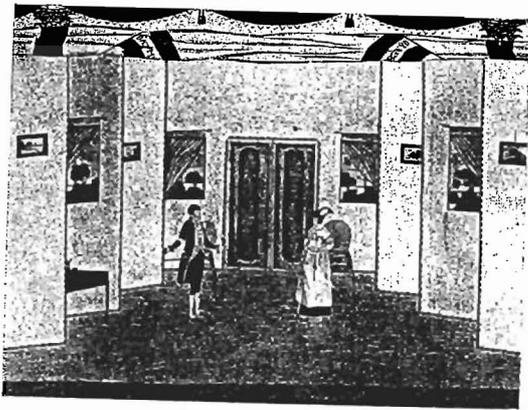
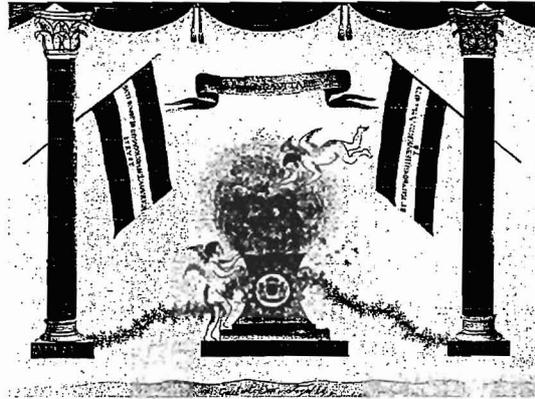
新潟県柏市にある“黒船館”所蔵の「出嶋俄芝居図」と、オランダのアムステルダム市立公文書館所蔵のものが同一であることが、神戸市立美術館学芸員の岡泰正氏によって報告されている。

筆者は、その黒船館を訪れ、巻物の形で、確かに慶賀による7枚の作品を見ることができた。

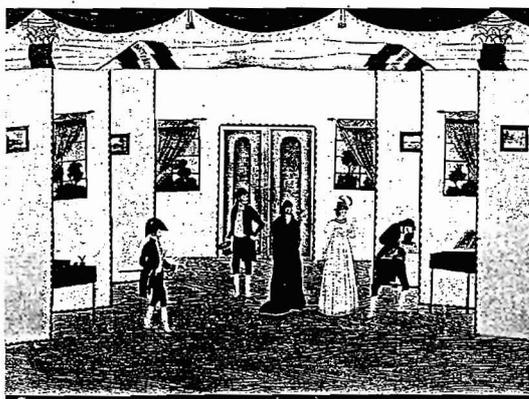
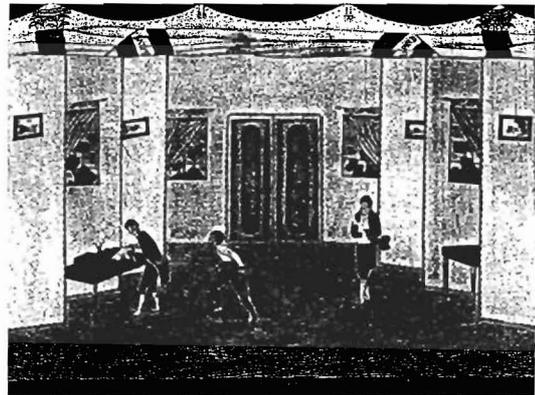
最初の1枚は、左右の円柱にそれぞれ旗がかけられ、中央には香盤を囲んで天使二人が花を捧げる絵が描かれている。正面には“ARS LONGA VITA BREVIS”、つまり「人生は短し、されど芸術の道は長し」という古代ギリシャのヒポクラテスの言葉が記されている。また、左右の旗には、「出島で我一人とオペレッタを行い、劇場を構え、アポロに捧げる」と記され、香盤にはオランダ国王の紋章と、その中に「我防がん」と記されている。

次の3枚が「短気な男」、残りの3枚が「2人の獵師とミルク売り娘」という演目のオペレッタが上演されたときの様子が描かれている。

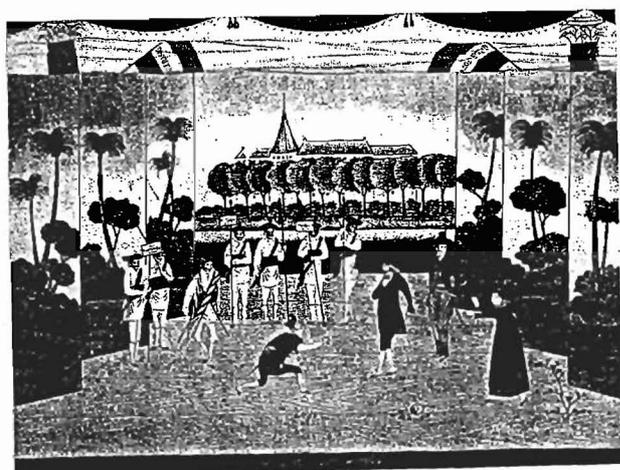
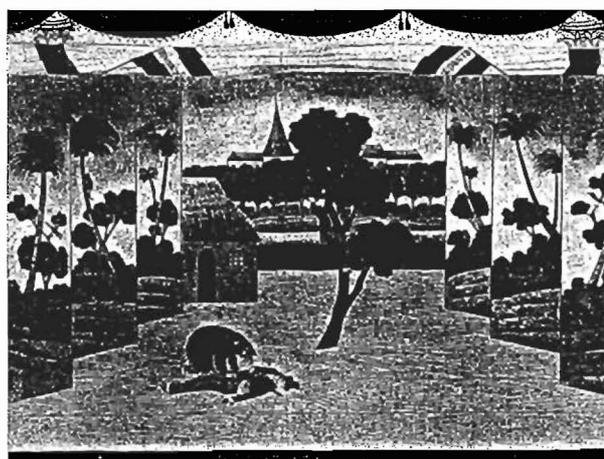
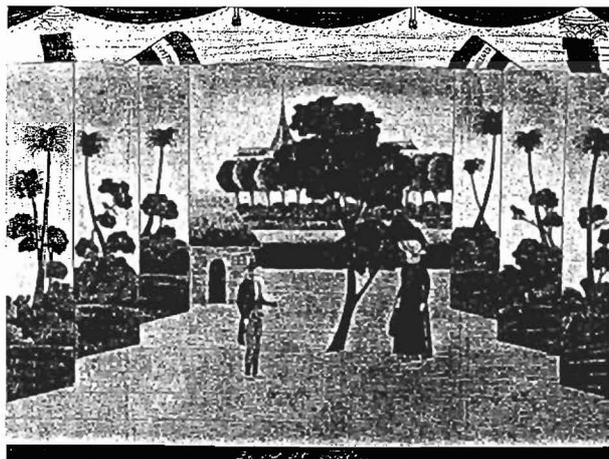
いわゆる泥絵と称される「出嶋俄芝居図」は、吉田小五郎が所持していたもので、その後、黒船館が所蔵することになったものである（以下の泥絵は、後述の出井氏の論文から引用）。



(1) 短気な男



(2) 2人の猟師とミルク売り娘



3 オペレッタの上演

川原慶賀が写し残したこの芝居図に記録された2つのオペレッタが1820年（文政3年）9月14日に、出島のオランダ商館で演じられたことは、いくつかの資料に記されている。ここでは、それらの資料から判明する2つのオペレッタの内容を記す。

そもそも、このオペレッタが出島で上演されるようになったいきさつは、次のようである。

文政から天保にかけて江戸町奉行として、また嘉永、安政にかけては大目付としてロシア使節プーチアチンとの折衝に功績を果たした筒井政憲は、その大役を仰せつかる前の一時期、1817年（文政14年）から1821年（文政4年）にかけて長崎奉行に勤めていたことがある。その筒井が役目を終えて、次の間宮信興と交代する際に、筒井の送別会の余興としてこのオペレッタ上演が企画されたのである。

演じたのは、オランダ商館に勤めている商館員だったようである。配役とその演者名も記されている。いずれにしても、実際に見たり聞いた日本人が忠実に写し記したものである。

以下は、それぞれの演目のあらすじである。

（1）短気な男

主役の性急な性格を持つ男・ダアモンと、金貸しだが訴訟事件をかかえたボルカムプ、その娘のユリヤの物語。金貸しのボルカムプ邸に滞在するダアモンは、娘ユリヤの美しさにひかれて夫婦になりたいと思う。ユリヤは、ダアモンの権力を利用して、金貸しの父・ボルカムプの訴訟に勝てるのではないかとくろむ一方、ダアモンもその訴訟の世話をし首尾よく運ば、ユリヤを自分のものにできるのではないかとくろむ、2幕からなる、いわば「どたばた劇」。

1幕は、娘とダアモンとの出会い。互いに企みをもつ。娘の申し出に、ボルカムプの訴訟を引き受けるダアモン。ボルカムプの訴訟内容の説明をいらいらしつつも耐えて聞くダアモン。訴状を取りにいったボルカムプが帰ってこないのを短気に待てないダアモンは、性急にも一人、書記のノタアリスのもとに駆けつけようと部屋を出て行く。

2幕は、父ボルカムプが娘にダアモンには注意するようにと警告する場面から始まる。一方、ダアモンの娘への申し出を、ダアモンの家来が娘に伝えに来

る。父親次第、と退く娘。そこにダアモンが戻り、家来に娘の返事を聞く。良い返事でないことを悟ったダアモンは、自分の叔父に訴訟の件を頼み、一件落着すれば娘を自分のものにできると思い、その内容を記した書状を性急にされたため、ノタアリスに持たせ叔父のもとに送る。その間、ユリヤの肖像画を書かせるように頼んでおいたダアモンの命に従って画師がやってきて、ユリヤを描き始める。そこに、叔父からの返事を携えてノタアリスが帰ってくる。訴訟に勝ったという知らせである。それを見たボルカムプは大いに喜ぶが、娘との縁談には良い返事をしない。しかし、娘ユリヤは、ダアモンの力がなければ訴訟には勝てなかったであろうと、父親を説き伏せ、めでたしめでたし。この間、ダアモンの性急さから、娘ユリヤの風貌と父親の風貌が混同してしまうというどたばた場面も挿入されている。

このオペレッタはフランスのエティエンヌ・フランソワ・ランティエ（1734-1826）の原作を、P.G.W.ヘイスパーク（1774-1833）がオランダ語訳したもので、幕間に音楽の演奏を挿入したものであると伝えられている。

（2）2人の獵師とミルク売り娘

ミルク売り娘のベルレットは、もともとは官人の娘だが、恋人のタンケレイトと駆け落ちしたあげく捨てられ、ミルク売りで生計をたてようとしている。ベルレットは、熊の皮で一攫千金を夢見る獵師ギリヨットとその友達のコラスに会う。ギリヨットはベルレットを口説くが、ベルレットは相手にしない。互いに、それぞれの道で生計をたてようと別れるが、ベルレットはミルクを入れる壺を失い、2人の獵師もそのうちにばらばらになり、コラスは、熊に遭遇し、命からがら小屋に逃れるが、ギリヨットは、コラスの帽子を発見し熊にやられたに違いないと、小屋の梁で首をくくろうとする中で、再び出会うことになる。一攫千金なんて、そんなにうまく行かないものだという教訓劇であるが、後日談があり、ベルレットを捨てたタンケレイトは大いに反省し、たまたまその後再会するベルレットとその父親に詫びを言って、めでたしめでたし。

1幕は、ミルク売りの娘と2人の獵師の出会いと、その後の展開。2幕は、タンケレイトとベルレットとの再会シーン。

このオペレッタは、フランスの劇作家・ルイ・アンソーム（1721-84）の台本に、イタリア出身で、パリで活躍したエジディオ・デュニ（1708-

75) が作曲したものである。

オランダ商館で演じられたものは、フィリップ・フレデリク・レインスラーヘル（生没年不詳）がオランダ語に翻訳したもの。もともと、このオペレッタの教訓劇は、ラ・フォンテーヌの『寓話』からのもので、オペレッタの原作は、1763年にパリで初演された、オーケストラ付きの、いわゆる喜歌劇である。出島では、オランダ語版でオーケストラの代わりに、簡単な伴奏で素人の商館員たちが演じたものと考えられる。

4 シーボルトのピアノ

(1) 熊谷五右衛門義比（よしかず）に贈られたピアノ

ところで、1823年に来日したシーボルトの医者としての名声は、すぐさま日本の至る所に伝わって行った。そんな評判を耳にした者の中に、長州（萩）の御用商人である熊谷五右衛門義比がいた。義比は、1824年11月ころに長崎に赴き、シーボルトに膝や足の痛みを診察してもらう機会を得たのである。熊谷家には、そのときにオランダ商館長だったストゥルレルから贈られたと思われるコーヒー茶碗とインク壺が残されている。その翌年にも、島原の小浜温泉で湯治した帰りに、シーボルトに会った形跡がある。1826年の江戸参府に際しては、下関にいたシーボルトをたずねて、病気治療のお礼を言ったことが、シーボルトの『江戸参府日記』に記されている。「…友人の中に、昨年出島で私の治療を受け、治療のため長崎にしばらく滞在していた長門出身の“熊谷”という非常に金持ちの商人の兄がいた。彼は、兄を介して刺を通じ、翌日病気の全快に対して私に礼を言おうとしていた…」とある。また、通事の荒木豊吉の代筆で、江戸参府途上の京都から、シーボルトは五右衛門に、依頼の薬箱購入に関する手紙を送っていることも判明している。

それから2年後の1828年、いわゆる“シーボルト事件”が発覚する1ヶ月前に、帰国準備をするシーボルトから“フォルテピアノ”を贈られることになる。

しかし、これ以後、明治、大正、昭和30年までの約125年は、熊谷家の蔵で人知れず保管されていくことになる。

「シーボルトのピアノ」として日の目を見ることになるのは、萩で医者をしていた郷土史家でもある田中助一氏による発見がきっかけである。その発見のニュースは、1955年（昭和30年）2月14日付けの朝日新聞西部本社の

朝刊に掲載されることになる。この発見の経緯は、その後、田中氏自身が『熊谷五右衛門義比とシーボルト～特に日本最古のピアノについて』（財団法人熊谷美術館、1967年5月20日発行）に記している。

それによると、ロンドンのロルフ社制作のスクウェアピアノでFからGまでの5オクターブ半の音域をもつものである。内部の白木の部分にオランダ語で「Tot gedachtenis aan mynen vriend Koemaja Dr.von Siebold 1828」、つまり“我が友、熊谷へ別れのために、ドクトル・フォン・シーボルト”とペン書きされており、確かにシーボルトが贈ったピアノであることが証明されたのである（写真は、後述の田中著の表紙から引用）。



この時点では6、7箇所音の出ない所があることから、1958年から59年にかけて、広島にあった「東洋楽器」で修理されている。その後、1965年に、財団法人熊谷美術館が設立されると同時に、他の貴重な所蔵品とともに「シーボルトのピアノ」として常時展示されるようになり、現在に至っている。

しかし、1998年（平成10年）に、オランダ在住のフルーティストである國森由美子氏が国立ライデン大学に勤務していた夫・國森正文氏とともに、熊谷家を訪れ、当時の当主である熊谷幸三氏に依頼して、「シーボルトのピアノ」の調査にあたり、ほぼ40年間メンテナンスを行っていなかったピアノの修復にあたることになる。

翌年、オランダ人のピアノ修復家であるリン・ハセラル氏をオランダから招き修復にあたるが、完全な修復にはいたらずハセラル氏は帰国。とりあえず修復したピアノを用い、2000年の「日蘭交流400周年記念」のプレイベントとして“170年の時を経て今甦るシーボルトのピアノ”と題したレクチャーコンサートが開かれ、ピアニストの上尾直毅氏によって、シーボルトのピアノの音色が甦った。

2000年の4月19日には、「日蘭交流400周年記念」事業で、修復未完のままピアノの展示が行われた。その6月に、ハセラル氏は亡くなり、修復作業は振り出しに戻ることになる。

2006年暮れに筆者が熊谷美術館を訪ねたときには、日本調律師組合が責任を持って修復にあたる旨の報告を得た。

このフォルテピアノが確かにシーボルト持参のものである証拠は、彼自身の手紙の中に記されている。シーボルトが来日する直前の、「ロンドン製のすばらしいピアノを手に入れた。楽譜やギターをあわせて700ルピーしたが、（これから過ごす）島での一人暮らしの慰めになるであろう」といった内容の手紙で、1823年6月21日付けの母親にあてたものである。また、手紙の中に記されているギターは、シーボルトの日本渡航用所持品リストにパリ製のものとされている。

（2）シーボルト作曲のピアノ曲

一般的にシーボルト作曲の「ピアノ曲」として知られている7曲のピアノ曲については、実際には、シーボルトが日本に滞在していたときに書き留めていた、いわば「日本の旋律」を、シーボルトと同郷で、晩年作曲家としても知られるようになったヨーゼフ・キュフナー（1776～1856）が編曲してピアノ曲にまとめて、『日本の旋律』と題して、1836年に刊行されたものが、その後、1874年、つまり、シーボルトもキュフナーも亡くなった後に、シーボルトの次男であるハインリッヒ・フォン・シーボルトがウィーンで再版したときに、その経緯を知らずに、『シーボルト著 日本楽譜』として出版されたのではないかとされている。従って、確かに、シーボルトの自筆で手書き譜が3つ残されているのと刊行された印刷楽譜とを比較すると、第1曲目をのぞく6曲は、いずれも単旋律で、いわゆる「日本の旋律」をシーボルトが書き記し、キュフナーが編曲したものであることが分かる。

ただし、1曲目は、ハ長調のかなり簡単なピアノ作品であるが、シーボルト自身の音楽的才能をうかがわせる唯一の作品として注目される。題名には「日本序曲 Eine Jaonische Overture」とシーボルトの自筆譜で記されている。その自筆譜と、1836年にキュフナーによって編曲されて刊行されたもの、さらにシーボルトの次男によって再版されたものは、次のように異なっている。

キュフナーによって手を加えられた部分を大まかに整理すると、シーボルト

の自筆譜の3小節目と10小節目、20小節目がカットされ、23小節目の1拍目に4分音符を一つ加えて1小節とし、23小節目の2拍目を24小節目の1拍目として小節線を1拍ずつずらすとともに音符が書き加えられてはいるが、「日本の旋律」の楽譜の26小節目までは、シーボルトの作品を基盤としたものとなっている。「日本の旋律」の27小節目から35小節目までは、基本的にキュフナーが付け加えたもので、「日本の旋律」の36小節目から最後の42小節目までは、1番括弧と2番括弧の反復記号を省いた形で、シーボルトの作品を基調としたものになっている。その他、「日本の旋律」には、強弱記号や速度記号、スラーやスタッカート、また音符や休符も書き添えられていたりする。しかし、「日本の旋律」の第2、3、4、5、6、7曲の、シーボルトの聴き取った単旋律をキュフナーが編曲したものと比べると、この第1曲は、その大半が、シーボルト自身が作曲したものである点で特筆すべきであろう。

実際に、この第1曲目を演奏してみると、さほど優れたピアノ曲とはいいがたいが、自筆譜の音符の記述方法を見ても、シーボルトに少なからず音楽的才能があったことが読み取れる（以下の楽譜は、後述の宮坂著、12、18、21頁より引用）。



自筆譜

また、1874年に再版された『日本楽譜』と1836年に刊行された『日本の旋律』とを比較すると、『日本の旋律』の第1小節目にはピアノシモの強弱記号が記されているのに対して、『日本楽譜』ではフォルテシモになっている点、従って『日本楽譜』の11小節目にはフォルテシモがない点、19、20小節に記されている“Tutta la forza”がない点、32小節目のフォルテシモが31小節目に記されている点、最後の復縦線が単なる小節線になっている点、“Allegretto vivace“が、”All. vivace”のように省略されている点などである。

『日本の旋律』

『日本楽譜』

この他、いわゆる“シーボルトのかつぼれ”なども、興味深い曲であるが、今回は、他の6曲についての分析は、他の機会に譲ることとする。

(以上は、いずれ整理し直して、平成19年度中に宮崎大学教育文化学部研究紀要に投稿予定である。)

主要引用・参考文献

- 石田純郎「文政三年に出島で演じられた小唱入喜劇『二人の獵師と乳売り娘』について」日蘭学会会誌第17号、1992年3月号、59～66頁
- 出井朱有「川原慶賀筆泥繪芝居狂言繪巻」日本美術工芸、1960年、16～28頁
- 兼重護『シーボルトと町絵師慶賀』長崎新聞社、2003年
- フランツ・フォン・シーボルト著・斎藤信訳『シーボルト参府旅行中の日記』思文閣出版、1983年
- 田中助一『熊谷五右衛門義比とシーボルト』財団法人熊谷美術館、1967年
- 宮坂純子・宮坂正英「シーボルト著『日本の旋律』と自筆楽譜について」石川禎一・沓沢宣賢他編『新・シーボルト研究Ⅱ社会・文化・芸術篇』八坂書房、2003年
- 竹井成美『南蛮音楽 その光と影』音楽之友社、1995年

平成17年度～平成18年度科学研究費補助金
基盤 (C)

1820年代の出島における音楽状況
～オペレッタ上演とシーボルトのピアノを中心に～

平成19年5月

研究者 竹井 成美
宮崎大学教育文化学部

〒889-2192 宮崎市学園木花台西1丁目1番地